

博物館だより



▲満泉寺石造釈迦如来坐像



▲大村観音堂の石造阿弥陀如来坐像

長野市松代町清野大村観音堂の 石造阿弥陀如来坐像

小山 丈夫

(1)

現在長野市立博物館には、長野市内の石造文化財調査により作成された、写真付調査カードが収蔵されている。この調査は「郷土を知る会」が昭和52年から57年にかけて長野市教委の委託を受けて実施したものである。調査の成果は、すでに『長野市の石造文化財1～5集』として公刊されているが、報告書の体裁上未公開となった資料を含め全石造物の写真を収録したこのカードの利用価値は失われていない。筆者はこのほど本調査カードを閲覧する機会に恵まれ、多くの知見を得ることができた。その中で本報告の清野大村観音堂石仏⁽¹⁾は、目を見張ったものの1つである。

過日、筆者は大村観音堂に石仏を実見調査したその結果、本像は本格的丸彫石仏として中世に遡る作例ではないかという疑問を持ち得たのである

(2)

大村は長野市松代町の西部、鞍骨山の山麓にひろがる清野地区のほぼ中程にある集落で、その北方、西から伸びる山脚端部の竹林に包まれた一角に閑寂な観音堂がある。境内には江戸初期と思われる無数の交名を刻む名号笠塔婆や蛇塔石とよばれる2メートル以上ある弥陀三尊種子自然石板碑などの石造物がみられ盛時が偲ばれる。堂内は内陣仏壇上に本尊の木造観音立像を納める厨子と、廃絶した十王堂から移されたという石仏群が並び本像もその一群の如く左脇の壇上に据えられていた。

法量は像高49.5cm、頂～顎17.3cm、髮際～顎11.5cm、面幅11.0cm、面奥14.6cm、臂張35.5cm、膝高7.7cm、膝張45.0cm、膝奥29.2cm。衲衣を偏袒右肩にまとう如来坐像である。材質は安山岩と見られ、像底は粗く彫り窪めて安定を良くし、銘文等は認められない。後世頸部を損傷し、セメントで粗い接合がなされており、面部は相貌不明なほど荒れて口

唇と鼻の一部の形跡が残るのみである。膝前で印を組んだ前腕部にも欠損があるが、右上に左手を重ね第2指を捻じた弥陀定印と見られ阿弥陀如来像であることがわかる。また頭部から肩にかけては磨滅が認められ一時露天にあったものかとも想像される。しかしながら、引締まった肉身とそれを蔽う衲衣の丁寧な表現などは明瞭にうかがえまた石仏に有りがちな破綻がなく、整ったバランスと堂々たる量感は石材の質感と相俟って、本像をより大きく感じさせている。

ここで本像の注目される点は、鎌倉末～南北朝期の作例とされ長野県宝に指定されている埴科郡坂城町満泉寺石造釈迦如来坐像と非常に近似していることにある。満泉寺像の特色については米山一政氏が次のように述べている。⁽²⁾

「…(前略)…螺髪は切り付けで大粒であるが比較的低く、鎌倉時代前期のように高くはないが次の室町時代のように弱いものでもない。また螺髪が斜め横に通っているのも鎌倉時代中期以後に通有のものである。

この像の特異な点は、全体が木彫にならって彫造していることで、衣文のたたみ方・襟裏・袖裏のえぐり込み・眉・鼻梁・口唇・三道・条帛などの彫りは心にくい程見事で、一見木彫かと思われる程に鑿跡の切れのよさを示している。しかし髮際をやや波形にし、頬の下膨れや衣文のたたみ方などには既に宋朝様式がうかがわれ、面奥が比較的数量少なく、やや俯瞰の相をそなえているところは、鎌倉後期も末様に位置すべきものと考えられる。

全体として安定した姿態に形制されていて、室町時代に見られないものである。このような本格的な石造丸彫り彫刻は東日本にこの時代のもものがほとんどないだけに、特異なものである。」

試みに両像の各部法量数値を比較対照してみたのが(表)である。これによると裳先の有無によ

る膝奥の数値を除けば、計測点における差は1～2cmの幅に納まってしまうのである。この見地からすれば、両像が同一規格のもとに制作された可能性を示すものと思われる。

また裳先の有無、膝前・左上臀部・腹部の衣文の扱い方、螺髪などはその意匠が相違する箇所も認められる。これは製作の精粗、あるいは造立の時期差、製作者の相違などの現れとも取れる。今後詳細な検討が必要と考える。

(3)

大村観音堂は『つちくれかがみ』(松代藩士落合保考著、宝永3(1706)年成立)に

観音堂、右高源寺之塔頭二有、靈驗縁起有とあるように、かつて同地に存した高源寺の堂宇であったと伝えられている。松代藩右筆堤俊詮(1802～?)編著になる『海津舊頭録』⁽³⁾によると、高源寺は往古天台宗で往生院西迎寺と称したが、永禄年中(1558～69)に及んで廃堂、御堂平・阿弥陀屋敷・塔堂寺の地名のみ残っていたところ、慶安年中(1648～51)真田信之の女児樹院の帰依篤く、甥にあたる清涼院・高源院菩提の為に再興、浄土宗清涼山往生院高源寺と改めたという。現在も観音堂裏手には損壊散乱した大鋒院・真田信之の名号笠塔婆が存し、真田家縁故の寺院であったことが知られる。しかし廃藩後は更級郡真島村に移され、後に廃絶してしまったため、今では由来等知る術がない。高源寺移転後の堂は大村の浄土宗林正寺の管理となって現在に至っている。

阿弥陀像が元々この観音堂の伝来であるかは不明である。堂には前述のように十王堂から移した一具の群像があって、或いは阿弥陀像もいずれかより持ち込まれたものかもしれない。ただし相当の重量があり、そう遠方からの移動というのも考え難い。

「清野村誌」⁽⁵⁾によれば、高源寺旧地の北東に接して鎮座する日吉神社は、清野氏数代の居宅で、のち現在の海津城の地に居を移すにあたり、該地に倉庫を建てて「禽廩屋敷」と称した場所であるという。清野氏は坂城村上氏の支族で村上家の代官九家の上座と伝えられるというが系譜も諸本が

あり、不明な点が多い。高源寺の前身に清野氏関係の仏堂を仮定することが許されるなら、『舊頭録』にいう「阿弥陀屋敷」の地名も注目されるのだが、しかし清野氏の清野居住年次が定かでないうえ、阿弥陀像の伝来自体が不明である限り、これ以上の詮索はゆるされまい。ただ満泉寺釈迦如来像は坂城町御所沢にあった村上氏の菩提寺、修善寺の本尊であったと伝えている。満泉寺像・観音堂像ともに、それぞれ村上氏、清野氏に極めて近い環境にあったことは両像の性格を考える上で十分考慮に値すると思われる。

(4)

今回の調査は一覧表形式の報告書では判らなかつた特徴ある石仏を、調査カードを検索することによって発見したことが契機となった。写真付カードは石造物の形状を概観するのに好都合なものである。博物館で許可を得れば閲覧可能であり、今後石造物の調査、研究をされる方にはこの利用をお勧めしたい。

筆者は仏像彫刻に関しては全くの素人である。しかし本像について触れた報文等見当たらないようでもあり、ここで浅学を顧みず紹介させて頂くこととした。大方の御教示を切望する次第である。

最後に文末ではあるが、本石仏を紹介するにあたって御助言、御協力を賜った林正寺、満泉寺両寺院、北沢善次郎夫妻、伊藤友久氏、原田和彦氏に深謝申し上げる次第である。

(佛教大学学生)

(注)

1. 本像は『長野市の石造文化財第4集』(1981年)に「その他の石仏 松代No.615」と登録されている。
2. 『更級埴科地方誌第2巻』中世編(1978年)
3. 『海津旧頭録』真田宝物館刊(1989年)
4. 高源寺については、関保男「清野高源寺と真田信之供養塔」(『長野』120号、1985年)、移転後の高源寺については、小山義登「清野高源寺と真田信之供養塔をみて」(『長野』128号、1986年)に詳しい。
5. 『長野県町村誌』所収



▲ 大村 観音堂 の 石造
▼



▲ 満泉寺の石造
▼ (長野県指定文化財調査報告書より)



法量対照表

	像 高	頂一顎	髮際一顎	面 幅	面 奥	臂 張	膝 高	膝 張	膝 奥
満 泉 寺 像	48.5	18.5	11.5	10.4	13.0	35.0	8.0	43.7	34.5
大 村 観 音 堂 像	49.5	17.3	11.5	11.0	14.6	35.5	7.7	45.0	29.2

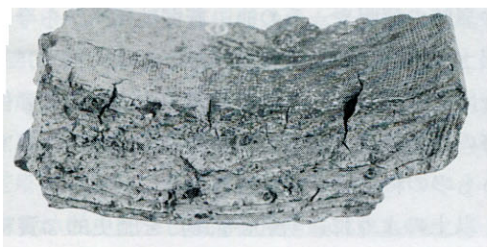
満泉寺像は『更級埴科地方誌』の数値。

善光寺平の古代仏教断想

原田 和彦



牟礼バイパス出土の軒平瓦（写真上と右の拓本）と、若槻田中出土の軒平瓦（写真下と右の拓本）。両者の文様には明らかな差がみられる。（拓本は、『長野県史』による）



善光寺は、その創建についていまだ定説がない。これは、それにかかわる直接資料がなく、間接資料（たとえば瓦や前立本尊など）によって類推していることに起因する。殊に近年の研究は、いわゆる善光寺瓦に議論が集中している。しかし、こうした議論の中には、瓦とは何かといった基本的な考察がおろそかになるあまり、瓦を資料化する手順に疑問を感じる論考も少なくない。

ところで、善光寺平には、善光寺の他にも、長野市篠ノ井の上石川廃寺跡、更埴市の雨宮廃寺跡などいくつかが確認されている。これらは主として瓦の散布地からの推定であり、伽藍の全貌や、寺域の確定、あるいは、瓦の供給関係などの実証的な資料の提示までには至っていない。この意味

からすれば、善光寺平における古代寺院跡の研究は、他の地域のそれに比べ、かなりの遅れがあることは否めない事実である。

ここでは、善光寺瓦に関する基本的な了解事項を確認するとともに、従来あまり顧みられなかった資料についても紹介したい。

1. 「善光寺瓦」について

善光寺の創建年代を論ずるにあたって、この善光寺瓦が多く用いられてきた。この瓦は、従来、白鳳時代のものであるとされ、善光寺もその頃にできたと考えられてきた。

しかし、昭和56年度から実施された「牟礼バイパス」関連の発掘調査で、善光寺境内から発見さ

れた瓦と同範の瓦（以下、便宜上「善光寺瓦」とする）が出土した。これは、住居跡から軒平瓦と、9世紀のものと思われる須恵器と伴って出土している。（なお、詳細については、山口純一「若槻出土のいわゆる善光寺瓦について」『長野』134号参照）

この瓦の発見により、瓦への年代観や、善光寺と法隆寺の関係など、興味深い研究が相次いで発表された。これらの研究はきわめて示唆に富むものである。しかし、瓦本来の性格についての吟味が不十分であることは、どの研究にも指摘できる。即ち、①この瓦は、善光寺の伽藍内からではなく、住居跡から発見されたものである点。②住居跡から出土した瓦の生産地（瓦窯）・消費地（寺院や官衙など）の関係が定かでない。③伴出した遺物が9世紀のものであるとしても、この瓦が焼かれはじめた時期をこれに求めるべきでないこと、すなわち、9世紀には、この瓦はすでに焼かれていたということがいえるのみであること（たとえば、伊藤延男「善光寺の建築」『善光寺 心のかたち』154ページ）、等々である。

このうち、殊に住居跡出土の瓦であるという点が見落とされている。すなわち、瓦本来のもつ使用方法とは違った、極めて2次的に使用、もしくは廃棄されているという点である。この点については、この北側に展開されると考えられる、田中窯跡群との関係が多分に考えられるのであるが、証に乏しく、この住居跡についての性格付けはまだ問題といえる。

また、善光寺出土の瓦と同範瓦であるものの、善光寺のいつの時期に使われたものかといった点が不明確なため、「善光寺瓦」のみを以て古代善光寺を論ずるには躊躇する。さらに、誤解を覚悟のうえで、あえて憶測するなら、この住居跡が、田中窯跡に関係したものと仮定し、この住居跡の瓦が、公的建物や寺などに班給されたとしても、すべて善光寺に班給されたと考える必要はないのではなからうか。すなわち、近辺に、寺跡などの瓦消費地を比定することも可能なのではなからうか。その根拠とするところは、まずこの近くの三

千寺地区には、白鳳仏が伝存するという点、のちに触れる、駒沢新町遺跡から、仏教関係の遺物が出土しているという点、この北には、善光寺平では、大室古墳群につく数を有する吉古墳群が存在し、古代の豪族と氏寺との関係が想定できることである。

前者は、銅造観音菩薩立像で、国の重要文化財に指定されておりこの存在は夙に知られている。この仏像に関しては、浅学のため、伝存の理由について論ずる力をもたないが、この仏像が、当初よりこの地に伝わるものと仮定して誤りがなければ、それなりの歴史的背景や、歴史的 position を与えるべきであり、牟礼バイパス出土の「善光寺瓦」や、駒沢新町出土の懸仏鑄型を含めて、長野市北部（若槻地区）における古代仏教文化の在り方を、従来の善光寺と結びつける考えから切り離して考察するにたる、好資料といえよう。

しかし、この推測はあまりにも冒険的すぎるばかりか、かなりの憶測が含まれるため、今後、田中窯跡の解明や、その他、若槻地籍内から今まで出土が確認されている瓦（たとえば、吉や、三千寺出土の瓦など）の再検討がすすめば、この住居跡の性格はもとより、「善光寺瓦」といわれているものの科学的了解が得られるであろう。

以上のように、「善光寺瓦」を歴史的な資料として用いるには、それなりの手続きが必要なのであり、安易に伴出遺物や、瓦の文様などから、歴史的な事実を導きだそうとするのは、多くの危険をともなう。またこれが善光寺で用いられた瓦としても、供給先の善光寺では、同一文様の瓦のみで葺かれていたとは考えにくく、時期区分による瓦の斑給体制や、それにとともなる寺院構造や、それをささえる諸体制の在り方の変化など、今後、解明すべき課題は多いといえる。

「善光寺瓦」の発見は、多くの研究成果を生み出したものの、現在全国的に行われている寺院跡の発掘や、そこから導きだされた研究成果に比べると、全国水準に到達していないことが明らかである。今後、生産・消費地の比定や、その供給関係といった基本的な問題から解決しないかぎり、

善光寺瓦の問題は、解決しないであろう。

そもそも、善光寺平における古代仏教文化の研究は、中世以降の善光寺信仰の隆盛に目を配るあまり、かなりそれらにひっぱられている帰来がある。仏教史はもとより、寺院内の構造においても古代と中世とは明らかに違うのであり、かつ又、古代にあっても、律令体制以前と、奈良時代の仏教は違うし、また、9世紀には、国分寺制、定額寺制などの変革にともない、仏教の在り方も変わる時期にあたる。こうしたことから、善光寺平における古代仏教文化の研究も、善光寺唯一という呪縛から解かれるべきであり、善光寺平周辺の寺院跡（廃寺跡）や、定額寺（たとえば、更級郡の安養寺・埴科郡の屋代寺）と、瓦窯跡との関係、国分寺造営の前後とそれらとの関係（たとえば、森郁夫「奈良時代における東国の寺院造営—軒瓦を中心として」『考古学雑誌』64—4など）、さらにあげるなら、貞観仏の伝わる松代・清水寺や、若穂・清水寺の史的位置など、より広い視野のもとでの研究に脱皮すべき時であると考える。

（たとえば、牛山佳幸氏は、善光寺を、水内郡の郡寺にあてて解釈しようとしている。（「善光寺の創建と善光寺信仰の発展」『善光寺 心とかたち』）

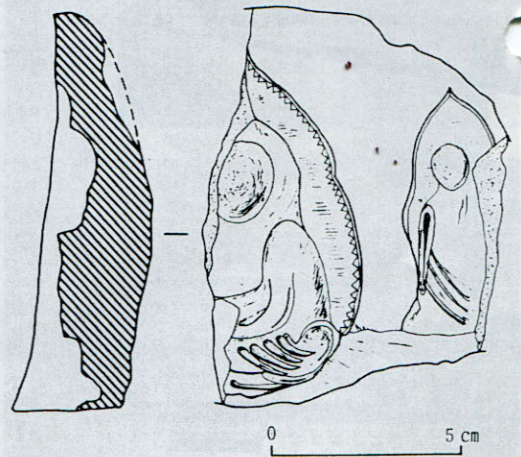
2. 懸仏鑄型（駒沢新町遺跡出土）

駒沢新町遺跡は、古墳時代の祭祀遺跡として注目され、昭和42年に長野市の指定を受けた駒沢祭祀遺跡に隣接した遺跡で、昭和43年度に発掘された。この調査のなかで特筆すべきは、「三尊仏の鑄型と、それに伴うかと思われる工房址と推想させるものを検出できたこと」である。（米山一政『駒沢新町遺跡』1981年）

この懸仏鑄型は、試掘坑内からの出土で、土師質の焼き、直径12.5cm、器体の半分を欠くもので、像は阿弥陀三尊と推定されている。（遮那藤麻呂『前掲書』）また、「この鑄型の年代考定がこの遺跡の編年をも決定づける重要な鍵」であるとしたうえで、「型式、11世紀以降に比定される」と結論づけている。（米山『前掲書』）

こうした点を勘案すると、この地域に、なんらかの仏教文化に貢献した施設が想起されよう。

しかし、「懸仏鑄型としたのは如何であろうか。懸仏は鏡板が光背に該当するので、光背は不要であるまいか」と、米山氏が当初から迷われているごとく、この鑄型についてもその性格が今だに定まっていない。今後、駒沢新町遺跡全体を含めた性格づけをすると共に、遺跡のなかにおける鑄型の性格を再考すべきではあるまいか。



おかげさまで

開館10周年!

長野市立博物館は、1981年9月23日に開館して以来、今年で10周年になりました。

長野市立博物館は、長野盆地を中心にした自然と人と物のかかわりを主題にした総合博物館としてオープンいたしました。

これまで、特別展示や、教室・講座事業、講演会などを通じて、郷土のさまざまな面を紹介してまいりました。今後とも、多くの方々のご指導、ご鞭撻を賜りたく存じます。

開館のテープカット風景→
(1981年)



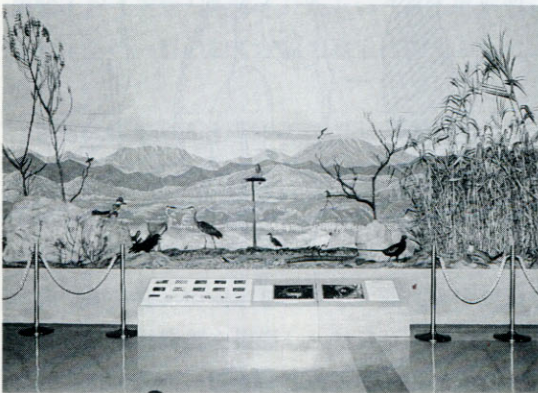
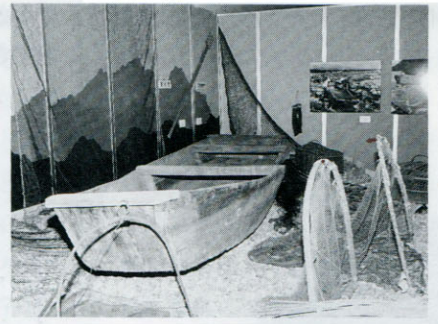
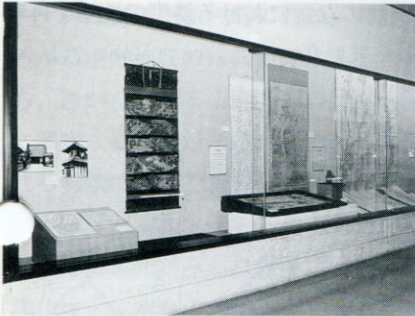
開館10周年記念特別展「千曲川展」開催される

当館では、開館10周年を記念して、特別展「千曲川」を、開催しました。

展示は、自然・考古学・民俗学・歴史学と、広い範囲にわたる内容で行ないました。

千曲川は、さまざまな面で長野盆地に住む人々に影響を与えてきました。それは、洪水などにみられるような悪影響から、肥沃な土を堆積するといった恵みを与える作用までさまざまです。

こうした、千曲川と、長野盆地に住んだ人々との関係を究明し、川に対する理解を深めていただく機会としてこの展示を開催することとなりました。



博物館だより No.19 1991.11.30

編集・発行 長野市立博物館

〒381-22 長野市小島田町1414

☎ (0262) 84-9011